

『明暗』

—Picturesque Light and Shade

野 網 摩 利 子

要 旨

漱石『明暗』では、ウィリアム・ジェイムズ『心理学大綱』が考察したように、登場人物の身体感覚によって、小説内の事物、出来事に明暗を与える。登場人物に身体が持たせられているには理由がある。その身体によって攔まれる世界像が、登場人物の動いてゆく現在の局面で小説に生産されることが目指されているからである。

精神領域も、身体による把握が認識されて初めて成り立つ。「影」「影像」という言葉で、登場人物の脳裏に起きている現象が表面化する。真の知識ならば、それらの縁（フリンジ）に連関している他のイメージが見えてくるはずだ。ジェイムズのこの考察が活かされた。お延という登場人物はこの原理に基づいて推理する。

本小説に多く見られる対話での駆け引きでは、「或物」「何か」「何処か」「ある一点」「其所」「局所」「斯う」といった言葉が駆使される。相手にその内容を挿入させようという。実体のなかった中身は、小説内で徐々に実在感を強め、現象する次第となってゆく。

はっきりと意識されていなかった対象に対し、登場人物は他者との関係のなかで情緒を揺り動かす。身体と意識とが往還運動を始め、あたかも対象が実在するかのような反応に至る。小説に事物、出来事を存在させるメカニズムが明らかにされた。

はじめに

『明暗』において、登場人物の身体はなぜ、どのようにして創られているかについて解明する。

身体感覚は、人間の日々の選択に深く関わる。漱石が読み込んでいたウィリアム・ジェイムズ『心理学大綱』では、人間が身体感覚を通じて行う選択についてこう述べられている。

Out of what is in itself an undistinguishable, swarming *continuum*, devoid of distinction or emphasis, our senses make for us, by attending to this motion and ignoring that, a world full of contrasts, of sharp accents, of abrupt changes, of picturesque light and shade.⁽¹⁾

【拙訳】それ自体は区別や強調を欠いた、見分けの付かない蟻集する連続体から、私たちの感覚はこの動きに注意を向け、あの動きを無視することによって、対照、鋭いアクセント、急激な変化、絵画的な明暗に満ちた世界をつくり出す。

感覚は「明暗に満ちた世界」を創り出す。幾人かの登場人物の感覚から現象する像が小説世界を形づくる。この『明暗』という題は、そのような地点を目標として掲げているようだ。

『明暗』は、津田という登場人物の痔の症状に関する、医者診察から始まる。身体に受ける感覚によってしか患者の推測ができない部位の診察である。この小説は、よく言われるように、病気の治癒へ向かう精神更生記が約束されているわけではない⁽²⁾。冒頭に医者診察が置かれたのは、身体感覚による察知が本小説では重視されると告げたのだ。感覚が何に注意を向け、何を無視するのか、それによって光と影による絵画のような明暗ができあがる。医者不在によって甦る印象や情緒にはさらに強いアクセントが付く。他者によって癒

『明暗』(野網)

痕を搔き落とされると、津田の身体にはまだ「奥」(一)に暗闇がある⁽³⁾。

第1節 影と記憶

従来、論者は『明暗』を読み終えたところから論じているため、津田がお延と結婚する前に一人の女を愛していたことを当然視しすぎている。しかし、それが開示されるのは、現存する『明暗』全百八十八章の後半部に相当する第三十四章であり、そのように組み立てられたのは小説がそのような方法を要したということである。

実際の『明暗』は、津田という男性主人公の記憶の内容がしだいに詰められてゆく構成となっている。津田は眼前の他者との交渉で頻繁に精神や身体が揺さぶられる。小説劈頭に、医者から「今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上りこはないから、今度は治療法を変へて根本的の手術を一思ひ^{ひとおし}に遣るより外に仕方ありませんね」(一)と宣告された。その帰りの電車で、「去年の疼痛」を「あり〜と記憶の舞台」に載せ、「自分の唸^{うな}り声」を耳にする。そのうち突発的に「何うしてあんな苦しい目に会つたんだらう」(二)と思い出し、つぶやく。意識の焦点が突然変わる。その牽引役は記憶されていた感覚であって、その感覚が彼の現在をも襲つたとされているのである。ここで津田は、疼痛を「何うして」と認識しなおす。身体感覚と認識とが相互に呼びあうシステムが出された。

津田の「何うして」は、彼を以前から知る人物たちによっていっそうこじ開けられてゆく。津田を囲む登場人物たちは彼の秘密を匂わせつつ、自分の発言権を行使する⁽⁴⁾。登場人物同士が、相手の内心を探り合うことで、この小説は「何うして」がこだまするしくみとなっている。

津田が入院の報知に藤井の叔父叔母の家へ行き、結婚の支度について話題に上っているとき藤井の叔母は、津田に対して妻を貰ったときの料簡を糺す。いざとなると自分は真面目だと津田が答えれば、叔母は今更言つたって始まらないことだからと言います。津田の顔に「不安の影」(二十七)が宿る。

この「影」を問題としたい。叔母が口の先まで出ながら言うのを止したと

こそ、津田にとって、実体的に把握できない何かとなる。叔母とのこの会話は、あとでふたたび思い起こされる。それは叔父から、昔の男は所有権の付いている女に惚れなかったものだという話を聞かされたときのことである。

先刻から重苦しい空気の影響を少しづつ感じてゐた津田の胸に、今夜聞いた叔父の言葉が、月の面を過ぎる浮雲のやうに、時々薄い陰を投げた。そのたびに他人から見ると、麦酒の泡と共に消えてしまふべき筈の言葉を、津田は却つて意味ありげに自分で追い掛けて見たり、又自分で追ひ戻して見たりした。其所に気の付いた時、彼は我ながら不愉快になつた。(…)

半日以上の暇を潰した此久し振の訪問を、単に斯ういふ快不快の立場から眺めた津田は、すぐ其対照として活潑な吉川夫人と其綺麗な応接間とを記憶の舞台に躍らした。つゞいて近頃漸く丸鬚に結び出したお延の顔が眼の前に動いた。(三十二)

津田は叔父の話を、意味ありげに追い掛けていたことに不意に気づき、そのことに不愉快を覚える。

叔母の話に対して津田は「不安の影」(二十七)を宿し、叔父の言葉によって「月の面を過ぎる浮雲」のような「薄い陰」を胸に投げかけられたと感じる。藤井家と対照的に思い出されている津田の上司の夫人である吉川夫人とその応接間においても、相手の本意が分からず、彼の眼に「疑ひの雲」がかかった。そのときも「思慮に充ちた不安」とでも形容されて然るべき一種の匂(十一)を帯びていたという。

藤井の叔母叔父との応対でよぎる「不安の影」、感じる「重苦しい空気」、さらに、津田の胸にもたらされる「月の面を過ぎる浮雲」あるいは「薄い陰」、これらは明らかな類縁性で結ばれる。この連合は何を意味しているのか。

津田の不安は記憶の舞台を回転させる。彼の連想が最後に、既婚者であることを示すお延の丸鬚に及ぶ。このとき彼の不安は「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう」、「此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう」(二)を根底に抱えることが浮き上がる。

『明暗』（野網）

登場人物が言葉では言い表せないような推移が精緻に捕らえられる。この叙述は、本人の解せぬうちに生じる不安の情緒、反応する神経、さらに振り返らずにはいられない意識といった、身体的反応と意識とのフィードバックしあう関係を捕捉する。津田の不安の広がりや影と光との混ざり具合によって巧妙に表現されてゆく。

第2節 感じとられる連合

津田の心身で激しく行われる運動が基盤にあり、小説進行の現在に小説の向かう先が決まるかのように展開している。もう一人の主人公、津田の妻であるお延が、津田に関心のある人物のなかで唯一、津田を解剖しうる材料を持ちあわせない。そこで彼女はどうかこの小説の鎖となつてゆく。何かに勘づき、押し迫るお延の頭の中の動きが追われる。

お延も、津田と同様、目前の人物の不明点を考え込ませられる。自分の目から隠されている何かの存在を感じとるまでの彼女の感覚の芽えは細部にわたって形象化されている。お延は他者の複雑な隠し事に対して、その明敏な感覚で分け入つてゆく。

入院した津田をおいて行った芝居の幕間での会食で、お延は吉川夫人が自分の前で津田の名前を回避するようなのを、何か理由があるに違いないと感じる。そして帰り際になつて話しかけてくる夫人の態度を見て思う。「今頃になつて夫の病気の見舞をいつてくれる夫人の心の中には、已を得ない社交上の辞令以外に、まだ何か存在してゐるのではなからうかと考へた」（五十五）。お延は吉川夫人の胸中に「何か」が潜んでゐるとにらむ。

言葉で捕らえ難いことを直感する能力を自負するお延の頭に夫の面影が浮かぶ。夫への不愉快が生じてしまうのは、その奥に吉川夫人がいるからだとお延は断定する。お延が吉川夫人に感じる「何か」（五十五）、そして、夫と自分とのあいだに挟まる「其邪魔もの」（五十七）はどちらも彼女の感覚的把握に過ぎないが、彼女が問いつめるほどにそれらは小説における実在感を強めてゆく。身体感覚ならびに情緒が言葉以前の何かにまわりつくことでそれらを際立た

せるのだ。

入れ替り立ち替り彼女の眼の前に浮ぶ、昨日からの関係者の顔や姿は、自分の乗つてゐる電車のやうに早く廻転する丈であつた。然し彼女はさうした目眩しい影像を一貫してゐる或物を心のうちに認めた。若くは其或物が根調で、さうした断片的な影像が眼の前を飛び廻るのだとも云へた。彼女は其或物を拈定しなければならなかつた。然し彼女の努力は容易に成效をもつて酬ひられなかつた。団子を認めた彼女は、遂に個々を貫いてゐる串を見定める事の出来ないうちに電車を下りてしまった。(七十七)⁽⁵⁾

お延は昨日から自分を取り巻いた関係者を思い浮かべ、その根底に「或物」を感じる。津田を見誤ったかもしれないという彼女の秘められた過失と、自己と対応する吉川夫人から感じとれる気配とのあいだに何らかの関係の存在を確信する。引用したくだけでは、彼女の脳裏に浮かぶ諸人物の影像同士を結ぶ「其或物」があるのを感覚的に分かっているのに、つまみだせるほどにはそれらを貫く「串」を見定められなかつたとされる。このように複数の人物と接して得た情緒が認識として蓄えられる。

第3節 類縁性の発見

お延は頭によぎる面影や影像を、彼女が現実を探し当てたい事柄に押し迫るヒントとして活用する。みずから頼みにするのはつぎのような感覚だ。

手紙を書き始めた今の彼女は、漸く一つ所に落付いた。さうして又一つ所に落付いた不安に悩まされ始めた。先刻電車の中で、ちらちら眼先に付き出した色々の影像は、みんな此一点に向つて集注するのだといふ事を、前後両様の比較から発見した彼女は、やつと自分を苦しめる不安の大根に辿り付いた。けれども其大根の正体は何うしても分らなかつた。勢ひ彼女は問題を未来に繰り越さなければならなかつた。(七十八)

『明暗』(野網)

「色々の^{イメ}影^ヰ像」がゆきつく一点を突き詰めたとされる。登場人物の頭のなかに蠢く「^{イメ}影^ヰ像」同士の関連が辿られている。思考内のイメージについて、漱石が参照したと考えられる文献を紹介しながら、考察してゆこう。ウィリアム・ジェイムズ『心理学大綱』第9章「意識の流れ」である。そこではこう述べられる。

Every definite image in the mind is steeped and dyed in the free water that flows round it. With it goes the sense of its relations, near and remote, the dying echo of whence it came to us, the dawning sense of whither it is to lead! The significance, the value, of the image is all in this halo or penumbra that surrounds and escorts it, —or rather that is fused into one with it and has become bone of its bone and flesh of its flesh; leaving it, it is true, an image of the same *thing* it was before, but making it an image of that thing newly taken and freshly understood⁽⁶⁾.

【拙訳】

心のなかで明確な像を結んでいるイメージはすべて、その周りを流れている流水に浸っていて、その水で染めあげられている。それによってこそ、そのイメージと近くも遠くもある関係の感覚、つまり、イメージが私たちのもとにやってきたところの消えゆく響きが生まれるのであり、それが向かおうとしているおぼろげな感覚が伝わるのである。イメージの意味、価値というのは、それを取り囲み、それにともなう、もしくは、それと一つに溶けあっている光背や半影部こそである。それらは骨の骨、肉の肉となっており、ゆえに、実際はかつてそうであった同じ事物のイメージとして残るものの、あらたに取りこまれ、あらためて理解されたその事物のイメージとなるのだ。

If we then consider the *cognitive function* of different states of

mind, we may feel assured that the difference between those that are mere 'acquaintance', and those that are 'knowledges-about' is reducible almost entirely to the absence or presence of psychic fringes or overtones. Knowledge *about* a thing is knowledge of its relations. Acquaintance with it is limitation to the bare impression which it makes. Of most of its relations we are only aware in the penumbral nascent way of a 'fringe' of unarticulated affinities about it⁽⁷⁾.

【拙訳】

異なる心の状態の認識に関する機能を考えるならば、単に知っているだけの状態とそれについての知識を持っている状態の違いとは、心のふちもしくは含みがあるかないかにほとんど還元できるとたしかに感じられる。ある事物について知識があるということは、その事物のもつ関係についての知識なのである。ある事物を知るということは、ある事物の与える生の印象に限られてくる。事物のもつ関係のほとんどについて、私たちはその周りにある不分明な類縁性のふちにしだいにぼんやりと気づくばかりである。

ジェイムズは心のなかの映像を取り囲むおぼろげな感覚を重視する。それらイメージはどこから来てどこへ行こうとするのか、周囲を縁どる感じはどうか。真に事物の知識があるということは、その周囲を取り囲む関係性を知っているということである。お延は自分の感じ取った「映像」に類縁する事物を探り、明確な印象を抱こうとしている。

ジェイムズがこの考察に続いて論じるのが、本稿冒頭で引いた感覚によってなされる選択についてである。私たちの感覚が、注意を向ける、向けないといった仕方、対照やアクセント、変化を付けて「絵画的な明暗に満ちた世界」⁽⁸⁾を作り出すという。こう述べられる。

If the sensations we receive from a given organ have their causes

【明暗】(野網)

thus picked out for us by the conformation of the organ's termination, Attention, on the other hand, out of all the sensations yielded, picks out certain ones as worthy of its notice and suppresses all the rest⁽⁹⁾.

【拙訳】

私たちがある一定の器官から受ける感覚とは、このように器官の末端の組織によって取り出される元を持つのだとすれば、一方で、注意とは、生みだされたすべての感覚のなかから、それが注目に値するあるものを取り出し、他のすべてを抑圧する。

お延は、感覚を抛りどころにし、対象同士を関係させあう思考と感覚との行き来を見つめている。彼女には対象同士の類縁感を発見できる資質がある。意識の辺縁からぼんやりと生まれてくる方向を感じとり、確かな印象に基づき、一つを選択しようとする。さらに対象同士を貫く「串」を見定め、統合しようとする。お延の頭の中が、このように不分明だが類縁感のある一連のイメージが飛び交うさまとして提示されている。それは、ジェイムズの説明する心と感覚の構造に比しても遜色ない。あるいはジェイムズの考察を視野に入れた叙述と言ってよいだろう。

第4節 あなたの知りたい事

根本的手術の宣告の衝撃から始まったこの小説は、登場人物にも読者にも津田の漠然とした「影」の根を推理させるようとして已まない。お延は脳裏にごめく「¹影像」の「²根調」になっている「³或物」(七十七)をつまみ出そうとする⁽¹⁰⁾。彼女は翌日になって津田と自分との間柄の見極めが付いていないという「不安の大根」(七十八)に辿り付く。しかし、その正体まではつかめない。お延は主観的直観に従う。小説内部に自らの感覚を持ち合わせない読者の足掛かりも、彼女の感覚に他ならない。感覚を頼りにする彼女の推理こそ、小説を

推し進めている。

ジェイムズは先に引用した考察を受けてさらに、接する現象の全体のなかからある帰結に向けて部分を選択し、つかみとっていく心のありようを重視し、こう述べている。

If, now, leaving the empirical combination of objects, we ask how the mind proceeds *rationally* to connect them, we find selection again to be omnipotent. In a future chapter we shall see that all Reasoning depends on the ability of the mind to break up the totality of the phenomenon reasoned about, into parts, and to pick out from among these the particular one which, in our given emergency, may lead to the proper conclusion⁽¹¹⁾.

【拙訳】

ここで対象同士の経験的結び合わせから離れて、心がどのように合理的に対象同士を結びつけようとするかについて尋ねるならば、私たちはふたたび選択がすべての力を握っているということに気づく。つづく章において、私たちは、すべての推論が、推論の対象となっている現象の全体を部分に分割する心の能力、それら部分のなかから、とくにいま必要とする状態においてしかるべき結論に至る特定の部分を取り出す心の能力にかかっていると分かるであろう。

『明暗』のお延にとって、投げ掛けられる情報のどこにどのように反応するかは推理の質を決める重要な要素である。そこへ小林という、津田の謎を小説内で拡大する役割を果たす人物に出くわす⁽¹²⁾。小林の取る論理を見てゆこう。小林は津田の留守宅に外套をもらいにきた。小林はお延のまだ知らない津田を知らせるが、小林は「肝心の所はわざと略してしまつた」(八十四)。

小林は、「あなたの知りたい事」、「津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないやうな水臭い所」、「あなたの知らない事」、「あなたの知りたいと思つて

『明暗』(野網)

事」、「あなたの知らなければならない事」を「まだ沢山」(八十四)持っていると言う。お延の最も知りたい箇所を省略し、それに隣接する箇所だけを報告するのだ。お延の、また、読者の知りたい欲望は否応なく掻き立てられる。

小林は何らかの決定的な情報の存在を握りながら明かさないという態度を取る。「そりやあなたは固より立派な貴婦人に違ないかも知れません。然し——」、「然し僕のいふのは津田君の事です」と言いながら、最後には「ぢや津田君に対する失言を取消しませう」「奥さんは僕の注意などを受ける必要がないと云はれました。それで僕も其後を話す事を遠慮しなければならなくなりました。考へると是も僕の失言でした。併せて取消します。其他もし奥さんの気に障つた事があつたら、総て取消します。みんな僕の失言です」(八十八)と言うばかりである。

取り消されることで、津田の不明点の存在感がお延のなかで増幅する。こうして彼女は自分の知らない結婚前にまで遡ってそれを探索すべきだと考えるようになる。小林の表現形式は言葉にできない箇所に最も重要な意味が潜在するかのように匂わせるこの小説自体の戦略を体現する。

第5節 暗部の浮上

この小説のおもしろい点の一つに、本人も明確に把握していない身体的精神的反応の理由を先に他者が察知するという点がある。登場人物間の目に見えないやりとりが小説内容としてあがる。まさに「明暗」とは、もともと実体も定かでない事柄が、感覚によって引き出され、揺れ動く実態を指すのだろう。

お秀は、「嫂さんはあんな人に火を付けられるやうな女ぢやありませんよ。それとも……」(九十八)と云い差す。眼前の人がはっきりと言わなかったり、言い差したりすることで、かえって津田に問いがもたげてくる。このようなさまは『明暗』でくりかえし扱われる。津田は大概黙って相手の言うその後を待つ。だが、彼の聞こうとすることはなかなかお秀の口から出てこない。お秀としてはそれを津田自身に言わせたい。「何だつて兄さんは又今日に限つて、そんな詰らない事を心配してゐらつしやるの。何か特別な事情でもあるの」「たゞ

気になるの」と言われれば、また津田の身体が反応する。「同時に先刻から催ふしてゐた収縮感が又彼の局部に起つた」(九十九)。津田の身体はお秀の言いそうで言わないことに反応する。

ここに扱われているのは、人間にとって言語化可能不可能をめぐるすれすれの状況である。他者が一歩手前まで言葉にしておきながら肝心なところで言葉にしない何か、津田の身体を揺さぶる。その結果、たとえば恐怖のような思考以前の段階から、言語的観念で認識する段階へと彼は移行するのだ。

「局所に触るやうな又触らないやうな双方の態度が、心のうちで双方を焦烈^まつたくした」(九十七)。津田とお秀の会話は深い意味を勘ぐったり、否定したりしながら進む。お秀が津田に「ちやんとした所を仰^{おつ}しやい」(九十九)と迫ることで話題にされている問題が津田の意識の焦点として浮上する。「局所」「ちやんとした所」こそ、読者の興味をそそる空所である。津田の秘密を洩らしそうなお秀の無駄口を得て、津田の心身を拘束する、お秀が明るみに出そうとする問題へにじり寄る。

津田がお秀をあしらうような態度に出たとき、お秀は「解りました」と言い放つ。津田が「何が」ときくと、「何故嫂さんに対して兄さんがそんなに気を置いてゐらつしやるかといふ意味がです」と言う。津田の頭に好奇心が起り、言うように促すが、「云ふ必要はないんです。たゞ私に其意味が解つたといふ事^{こと}を承知して頂けば沢山なんです」(百二)という答えが返ってくる。登場人物同士暗黙のうちに「其意味」と指される、言うにはばかれる何かが確実に伝わる状況を経て、ここでもまた津田の情緒が突然破裂する事態となる。

「兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでせうか。よし権利がないにした所で、もし左右した疑を妹が少しでも有^もつてゐるなら、綺麗にそれを晴らして呉れるのが兄の義務——義務は取り消します、私には不^ふ釣^{つり}合^あひな言葉かも知れませんから。——少なくとも兄の人情でせう。私は今其人情を有^もつてゐらつしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲^{かな}しみます」

「何を生意気な事を云ふんだ。黙つてゐろ、何にも解りもしない癖に」

『明暗』(野網)

津田の痲癩は始めて破裂した。

「お前に人格といふ言葉の意味が解るか。高^{たか}が女学校を卒業した位で、そんな言葉^{ことば}を己^{おの}の前で人並に使ふのからして不都合だ」

「私は言葉に重きを置いてゐやしません。事実を問題にしてゐるのです」

「事実とは何だ。己の頭の中にある事実が、お前のやうな教養に乏しい女^{つゝ}に捕まへられると思ふのか。馬鹿め」(百二)

人格を問題にされると感情が前面に出てしまう津田がこのように描かれれば、あたかもある事実が確かに隠されているかのように現実味を帯びはじめる。津田が疼痛とともに思い出してしまうあの「何うして」はこうして再問題化される。

小説のとる戦略を要約的に述べるなら、つぎのようになろう。突然湧きあがってきたかのように見える情緒がじつは、これまで経てきた情緒と類縁関係を結びつつ、当人が通常識閥下に抑圧してあるような疑問と、それに附着している情緒を掻き立ててしまう。さらに本人よりも他者の方がその実体を信じ、けしかけるためにいっそうその情緒が津田の生理に定着する。このような運動が形成されたのだ。

津田の周囲の登場人物がなすのは顕微鏡その他の器具を使っての実験ではない。また透視でもない⁽¹³⁾。それは身近な人間による肉眼の観察であり、相手の闇の部分は何とか明るみに出そうという攻防である。読者も注視するそれらの観察ならびに攻防が鋭く激しいほどに、津田の身体的印象に反応が起り、彼の記憶が再組織化され、現在時が更新される。つまり、津田の身体的領域から精神的領域にまでいたる相互運動が導かれるのだ。

第6節 関係を知る感じ

この小説は、登場人物が身体でどのように、謎と思われる事柄を受け止めてゆくかという点に大きな注意が払われ、謎を構成してきた。この点についてこれまで考察されたことはなかった。しかし、小説の方法が露骨に分かる場面が

ある。

津田とお秀とが言い合いをしている最中にお延は病室の手前まで来て、お秀の口による「兄さんは嫂さんより外にもまだ大事にしてゐる人があるのだ」という句を聴く。それはお延の心を震わせ、「際立つて明瞭に聞こえた此一句ほどお延に取つて大切なものはなかつた。同時に此一句程彼女にとって不明瞭なものもなかつた。後を聞かなければ、それ丈で独立した役にはとても立てられなかつた」(百三)とある。ならば、後まで聞いてから病室に入ったらよさうなものであるが、そのような進行は取られない。なぜかといえば、登場人物が五感を駆使して推理を積み重ねるありさまの叙述こそがこの小説の目論見だからである。ここでお延が簡単に津田の謎の全容を知ってしまえば、小説の意図が果たされない。

たとえば、病室に入ってきたお延を見て津田の顔には「困つたといふ心持と、助かつたといふ心持」が出るが、お延はそこに推理に値するものを発見する。事実追求の現段階が確認される。「彼女は此時夫の面上に現はれた表情の一部分から、或物を疑つても差支ないといふ証左を、永く心の中に掴んだ。然しそれは秘密であつた」(百四)とある。耳に飛び込んできた「不明瞭なもの」と「或物」とがつなぎあわされる。そのとき彼女の推理によって津田の謎が形づくられるのだ。

お延は持ってきた金をちらつかせ、恩着せがましく金を置いていこうとしたお秀の鼻を明かす。彼女の推理は続く。「小林の残酷に残して行つた正体の解らない黒い一点、それはいまだに彼女の胸の上にあつた。お秀の口から迸ばしるやうに出た不審の一句、それも疑惑の星となつて彼女の頭の中に鈍い瞬きを見せた」(百十二)とある。お延がいざという場合に片付けたい相手とは「津田の愛を自分から奪ふ人」であるとまで感づいている。「お延はそれ以外に何にも知らなかつた。然し何処かに此相手が潜んでゐるとは思へた。お秀と自分等夫婦の間に起つた波瀾が、あゝ迄際どくならず済んだなら、お延は行掛り上、是非共津田の腹のなかにある此相手を、遠くから探らなければならぬ順序だったのである」(百十二)とされる。この「相手」の潜む「何処か」はむろん小説内にある。いや、お延がそのように目がけて探索すればするほど、その「相

『明暗』(野網)

手」は小説内に位置を得るしくみになっている。一登場人物の現在の奮闘によって、他の登場人物の過去に照明が当たり、何かが出現するその動態が描かれた。

お延とお秀との対話では、これまでも津田の謎を指すのに使われてきた、指す対象の不明瞭な指示代名詞が踊る。「もし機会が許すならば、お秀の胸の格別なある一点に、打診を試ろみたいといふ希望が、お延の方にはあつた。其所を敲かせて貰つて局部から自然に出る本音を充分に聴く事は、津田と打ち合せを済ました訪問の主意でも何でもなかつたけれども、お延自身からいふと、うまく媾和の役目を遣り終せて帰るよりも遥かに重大な用向であつた」(百二十四)とある。お延はお秀が津田に関して何を知っているかを知らないために「ある一点」「其所」「局部」としか名指すことができない。

徐々に読者にはお延の知り得ているよりも多くの情報が与えられ、読者は他者の急所に近づいたり遠のいたりするお延の奮闘が手に取れるようになっていく。このときお延はお秀が先回りして吉川夫人を訪問していることを知らないため、吉川夫人の名前を出してみたときのお秀の、含みのある表情の原因が分からない。お延は「それでも論戦の刺撃で、事実の面影を突き留め」(百二十八)ようとする。

津田に隠し事があるとにらんで、お秀の「局部」からもあたりをつけておきたいお延がこう記された。一登場人物が他の人物のある事実をめぐる関連の一端を掻き集め、推論を打ち立てようとする。それは、述べてきたウィリアム・ジェームズに代表される当時の心理学の水準と引き合わせてもよいだろう。以下にさらなる考察を行う。

お延はお秀に、津田が女に関して何んな考えを持っているのかという点について、兄妹としての意見から訊きはじめ、中身のない指示代名詞を使って「参考に無論なるのよ。然し其事ならあたしだつて疾うから知つてるわ」と鎌を掛ける。

お延の鎌は際どい所で投げ掛けられた。お秀は果して掛つた。

「けれども大丈夫よ。延子さんなら大丈夫よ」

「大丈夫だけれども危険いのよ。何うしても秀子さんから詳しい話を聴かして頂かないと」

「あら、あたし何にも知らないわ」

斯ういつたお秀は急に緩くなつた。それが何の羞恥のために起つたのかは、いくら緊張したお延の神経でも揣摩できなかつた。しかも彼女は此訪問の最初に同じ現象から受けた初度の記憶をまだ忘れずにゐた。吉川夫人の名前を点じた時に見た其薄緞い顔と、今彼女の面前に再現した此赤面の間に何んな関係があるのか、それはいくら物の異同を嗅ぎ分ける事に妙を得た彼女にも見当が付かなかつた。彼女は此場合無理にも二つのものを繋いで見たくつて堪らなかつた。けれどもそれを繋ぎ合せる綱は、何処を何う探したつて、金輪際出て来つこなかつた。お延に取つて最も不幸な点は、現在の自分の力に余る此二つのものゝ間に、屹度或る聯絡が存在してゐるに相違ないといふ推測であつた。さうして其聯絡が、今の彼女に取つて、頗る重大な意味を有つてゐるに相違ないといふ一種の予覚であつた。自然彼女は其所をもつと突つて見るより外に仕方がなかつた。(百二十八)

ここでお延の重視する「関係」「綱」「聯絡」は、彼女の推論を成り立たせるうでで欠くことができない。彼女には少ない材料しか与えられていないがその関連を探るために、五感を投入して推理している。

ジェームズの『心理学大綱』の「意識の流れ」と題された章では、何かと何かとのつながりを知る「感じ」についてつぎのような説明がなされていて示唆的である。

If there be such things as feelings at all, then so surely as relations between objects exist in rerumnaturâ, so surely, and more surely, do feelings exist to which these relations are known. There is not a conjunction or a preposition, and hardly an adverbial phrase, syntactic form, or inflection of voice, in human speech, that dose not express some shading or other of relation which we at some

『明暗』(野網)

moment actually feel to exist between the larger objects of our thought⁽¹⁴⁾.

【拙訳】

いったい感じというものがあるとするならば、本来的に対象間の関係が存在するのと同じように確実に、それ以上確実にこれらの関係を知る感じが存在している。人間の言語の接続詞、前置詞やほとんどすべての副詞句、構文、声の抑揚のうちで、私たちの思考の、より大きな対象間に存在すると実際に私たちがある瞬間に感じる何らかの関係の陰影を表現していないものはない。

ジェイムズは対象同士を引きあわせる意識の流れを前景化する。この文章に見られる「some shading or other of relation」、対象にまつわる「関係の陰影」という考え方は、『明暗』にとって重要だろう。この小説はお延という女性登場人物に鋭敏な感覚を与えた。何か分からないある対象を指定させ、それを取り巻く、かすかな感覚を頼りに、何らかのおもむきを現すような言葉で表現するしかない。感じとられ、表現されるその「陰影」こそが「明暗」の「暗」である。

漱石に血肉化されていたジェイムズの論考はつづいて、名づけられないような意識の状態や質へと踏み込む。

Suppose three successive persons say to us: 'Wait!' 'Hark!' 'Look!' Our consciousness is thrown into three quite different attitudes of expectancy, although no definite object is before it in any one of the three cases. Leaving out different actual bodily attitudes, and leaving out the reverberating images of the three words, which are of course diverse, probably no one will deny the existence of a residual conscious affection, a sense of the direction from which an impression is about to come, although no positive impression is yet

there⁽¹⁵⁾.

【拙訳】

三人の人がつぎつぎと「待て!」「聞け!」「見よ!」と言ったとしよう。いずれの場合も意識の前に明確な対象はないけれども、私たちの意識は三つのまったく異なる期待の心構えに置かれる。異なった実際の身体的状態や、もちろん様々である三つの言葉の喚起するイメージを除くなら、おそらく、そこに残存する意識の偏りの存在を否定する者は誰もいないだろう。すなわちそれは、たとえまだはっきりした印象がないにしても、ある印象がいまにもやって来ようとする方向についての感覚である。

ジェイムズが着目するのは、方向の感じというおもむきの察知、向かう先をつかみとる印象である。『明暗』においてそれらは、登場人物ならびに小説を方向づける、かすかだが強力な布陣を組んでいる。

吉川夫人の名を出されての、お秀の極まり悪い顔と、津田について詳しい話をきかせてほしいと言われたときの彼女の赤らめた顔との「関係」、「連絡」をお延は推測し、「其連絡」が重大な意味を持っているにちがいないと彼女ならではの予覚を働かせる。その関係性からある流れを見出し、何かの出現をつかみとろうとする。

得られた感じを指示代名詞でかろうじて言語に載せることでその方向性に棹さし、他者に内容を埋めさせ、はっきりした印象を得ようと試みている。

咄嗟の衝動に支配されたお延は、自分の口を衝いて出る嘘を抑へる事が出来なかつた。

「吉川の奥さんからも伺った事があるのよ」(…)

「あら何を」

「その事よ」

「その事つて、何んな事なの」

お延にはもう後がなかつた。お秀には先があつた。

『明暗』（野網）

「嘘でせう」

「嘘ぢやないのよ。津田の事よ」(…)

「変ね。津田の事なんか、吉川の奥さんがお話しになる訳がないのにね。何うしたんでせう」。

「でも本当よ、秀子さん」

お秀は始めて声を出して笑った。

「そりや本当でせうよ、誰も嘘だと思ふものなんかありやしないわ。だけど何んな事なの、一体」(百二十九)

お延は津田のために自分に打ち明けてほしいとお秀に頭を下げるが、成功しない。お秀が言い訳のようなことを言い出すのを聴いて、はっと思い、お秀を誘い出すために嘘を重ねてしまう。

天恵てんけいの如く彼女の前に露出された此時のお秀の背後に何が潜んでゐるのだらう。お延はすぐ其暗闇を衝かうとした。三度目の嘘が安々と彼女の口を滑つて出た。

「そりや解つてるのよ。あなたのなすつた事も、あなたのなすつた精神も、あたしにはちやんと解つてるのよ。だから隠し立をしないで、みんな打ち明けて頂戴な。お厭？」(百三十)。

お延は自分の嘘に、まだ見えない津田の「奥」(百四十七)を引き寄せる役割を期待する。お秀が津田について問題にしたい「事実」(百二)や、吉川夫人の言う、津田と夫人の「二人に共通な事実」(百三十八)は、お延の感覚を通した追撃ではじめて実在感を得るのだ。感情の籠もったお延の奮闘によって、実態のはっきりしない津田の「事実」が、ある方向へと追いつめられ、多くの情緒を喚起し、形を備えてゆく。

第7節 イメージ連関

お延はお秀宅から、津田の見舞へと病院に向かおうとしていた矢先、電車に吉川夫人らしき人の「影」を見かけ、病院に行くのを逡巡しはじめる。

お延はそれ以上にまだ敏い気を遠くの方迄廻してゐた。彼女は自分に対して仕組まれた謀計が、内密に何処かで進行してゐるらしいと迄癩付いた。首謀者は誰にしろ、お秀が其一人である事は確であつた。吉川夫人が関係してゐるのも明かに推測された。(…)如何な事があらうとも、夫丈は共謀者の仲間入はよもしまいと念じた彼女の足は、堀の門を出るや否や、ひとりですぐ病院の方へ向いたのである。

その心理作用が今喰い留められなければならなくなつた時、通りで会つた電車の影をお延は腹の底から呪つた。もし車中の人吉川夫人であつたとすれば、もし吉川夫人が津田の所へ見舞に行つたとすれば、もし見舞に行つた序に、——。如何に伶俐なお延にも考へる自由の与へられてゐない其後は容易に出て来なかつた。けれども結果は一つであつた。彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた。彼女は何がなしに、此三人を巴のやうに眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電気を通はせ合つてゐるかも知れない」(百四十三)

お延は自分をめぐる謀計を推測し、勘によって詰めてきた。ついに彼女のなかで、それへの津田の関与も揺るぎないものになる。

先にジェイズを参照したように、彼女の胸中はここにおいても、イメージのつながりによって表されている。お延が、お秀の「冷笑の影」(百二十八)、吉川夫人らしき「電車の影」へとイメージを連鎖させる。「彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた」とある。「巴」と言われるその連結はすべてお延の頭のなかに生じていることだが、すでに事実を先

『明暗』（野網）

回りして知っている読者に追認される。お延は類縁関係を感じることで、これからまだ実行に移されていない謀計の辺縁を嗅ぎとろうとする。

吉川夫人の「影」に動揺するお延の身体的反応とその情緒、ならびにそこから一定の観念を導き出すお延のありさまが描かれた。この小説の謎は登場人物の穿鑿によって膨らみ続ける。小説として読者を惹きつけつつ、より効果的に、登場人物の身体的な印象から精神的な観念までの生の営みが提示されたのである。

第8節 どこから／どちらへ

津田自身捕らえきれていない自分の暗部は、むしろその実体を捜し求めるお延の実感によって肉付けられる。ついに津田への直接的追求となる場面である。とうとう津田の内部の事実に押し迫る。これまで『明暗』で重ねて駆使されてきた、相手の腹を探りあい、さまざまな参照項同士をつなぎ、相手の隠す謎のありかの方向性だけでも得ようとする攻防が集中的に表れることになる。

吉川夫人の来た訳をきくお延に対して津田は都合の悪い所を巧みに省略する。「たゞ落ち付かないのは互の腹であつた。お延は此単純な説明を透して、其奥を覗き込まうとした。津田は飽く迄もそれを見せまいと覚悟した」（百四十七）とあるとおり、問いに表面的には答えるが本質的には答えない。この暗闘が、小説内容として、確固たる位置を得るに至る。「戦争は、此内部の事実を、其儘表面へ追ひ出す事が出来るか出来ないかで、一段落付かなければならない道理であつた」（百四十七）とある。外側から見れば問題のない津田の様子がお延のその鋭い感覚を通せば、内部が「明暗に満ちた世界」⁽¹⁶⁾となっているということだ。津田の事実が仮構され、それが明らかになればお延は疑を晴らすという。そのために彼女は全身を挙げてそれにこだわる。

「本当に彼女の目指す所は、寧ろ真実相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑を晴らすのが主眼であつた。さうして其疑ひを晴らすのは、津田の愛を対象に置く彼女の生存上、絶対に必要であつた。それ自身が既に大きな目的であつた。殆んど方便とも手段とも云はれない程重い意味を彼女の眼先へ突き付けて

ゐた。(／＼) 彼女は前後の関係から、思量分別の許す限り、全身を挙げて其所へ拘泥らなければならなかつた」(百四十七)とある。

お延の感じとる方向があり、津田が正直でありさえすれば言葉にできるはずだという彼女の確信がある。お延が津田に心身の開示を迫ることで、小説の現在時が過去・未来へと開いてゆく。

「死ぬなんて大袈裟な言葉は使はないでも可いやね。第一何にもないぢやないか、何所にも。もしあるなら云つて御覧な。さうすればおれの方でも弁解もしようし、説明もしようけれども、初手から根のない苦情ぢや手の付けようがないぢやないか」

「根は貴方のお腹の中にある筈ですわ」

「困るなそれ丈ぢや。——お前小林から何かしやくられたね。屹度さうに違ない。小林が何を云つたか其所で話して御覧よ。遠慮は要らないから」(百四十七)

津田の言葉つきなり様子なりからして、お延は彼の心を明瞭に推察する事が出来た。——夫は彼の留守に小林の来た事を苦にしている。其小林が自分に何を話したかを猶氣に病んでゐる。さうして其話の内容は、まだ判然掴んでゐない。だから鎌を掛けて自分を釣り出さうとする。

其所に明らかな秘密があつた。材料として彼女の胸に蓄はへられて来た是迄の一切は、疑もなく矛盾もなく、悉く同じ方角に向つて注ぎ込んでゐた。秘密は確實であつた。青天白日のやうに明らかであつた。同時に青天白日と同じ事で、何処にも其影を宿さなかつた。(百四十八)

すでに引用したジェイムズ『心理学大綱』をここでも参照しよう。ジェイムズは心理の漠然とした不分明な状態に着目する。「心のなかの明確なイメージ」は「その周りを流れる自由な水」に浸り、染められているから、「イメージ同士の関係」が「近いのか遠いのか、消えかかる音がどこから私たちのもとにやってきたのか、兆しはじめる感じがどちらへ連れていこうとしているのか」が

『明暗』（野網）

分かるという(17)。

お延がこれまで吉川夫人、小林、お秀、津田と応対して蓄えてきた材料の一切は「悉く同じ方角」に「注ぎ込んでゐた」とある。彼女は不分明な状態におけるイメージ同士の関係、流れる方向性を掴んでいる。だがその中身を知らない。

悩乱のうちにまだ一分の商量を余した利巧な彼女は、夫の掛けた鎌を外さずに、すぐ向ふへ掛け返した。

「ぢや本当を云ひませう。実は小林さんから詳しい話をみんな聴いてしまつたんです。だから隠したつてもう駄目よ。貴方も随分非道い方ね」

彼女の云ひ草は殆ど出鱈目に近かつた。(…)

反響はすぐ夫の上に来た。津田は此出鱈目の前に退避ろぐ気色を見せた。お秀の所で遣り損なつた苦い経験にも懲りず、又同じ冒険を試みたお延の度胸は酬いられさうになつた。彼女は一躍して進んだ。

「何故斯うならない前に、打ち明けて下さらなかつたんです」

「斯うならない前」といふ言葉は曖昧であつた。津田は其意味を捕捉するに苦しんだ。肝心のお延には猶解らなかつた。だから訊かれても説明しなかつた。津田はたゞぼんやりと念を押した。

「真逆温泉へ行く事をいふんぢやあるまいね。それが不都合だと云ふんなら、已めても構はないが」

お延は意外な顔をした。(百四十八)

彼女がした冒険は、津田の秘密を津田自身の言葉で埋めさせることを求めて中身の空虚な言葉を行使する賭けである。津田は温泉行という、手にしたばかりの秘密を洩らすのであるが、お延の追求はそこへ及ばない。すでに津田の秘密を知っている読者が、そこに臭さを感じとれないお延に地団駄を踏むようできています。

明瞭な事実を持たないため明瞭に言えないお延が津田につきのように飛びかかる。

「ぢや話して頂戴。どうぞ話して頂戴。隠さずにみんな此所で話して頂戴。さうして一思ひに安心させて頂戴」

津田は面喰つた。彼の心は波のやうに前後へ揺き始めた。彼はいつその事思ひ切つて、何も彼もお延の前に浚け出してしまはうかと思つた。と共に、自分はたゞ疑がはれてゐる丈で、実証を握られてゐるのではないとも推断した。もしお延が事実を知つてゐるなら、此所迄押して来て、それを彼の顔に叩き付けない筈はあるまいとも考へた。

彼は気の毒になつた。同時に逃げる余地は彼にまだ残つてゐた。道義心と利害心が高低を描いて彼の心を上下へ動かした。(百四十九)

秘密を掘り起こそうとするお延によって、津田は追いつめられる。他者に心の開示を迫られるその時、最も激しくなる人間の動揺が示される。津田は万一の場合にお延の体面を受け合うという妥協を提案する。「實際此言葉によつて代表される最も適切な意味が彼の肚にあつた事は慥であつた。明敏なお延の眼にそれが映つた時、彼女の昂奮は漸く喰ひ留められた」とある。感情の潮が秘密の存在を認める言葉で収まっていく。「彼は明らかに妥協といふ字を使つた。其裏に彼女の根限り掘り返さうと力めた秘密の潜在する事を暗に自白した。自白？ 彼女は能く自分に念を押して見た。さうしてそれが黙認に近い自白に違ひないといふ事を確かめた時、彼女は口惜しがると同時に喜こんだ」(百五十)。

人間の精神の根を掘り返そうとする対話は単に言葉のレヴェルでなされてゐるのではない。それは、身体感覚による把握、あるいは、連合性や向かう方向性に敏感な直覚といった印象のレヴェルにおいてとくに激しく行われている。言葉と印象の二つのレヴェルを相互に行き来しながら攻防が続く。

通常、『明暗』論では、この小説が心理、ないしは、意識の流れを追求しているという見解が出されている⁽¹⁸⁾。そこで言われている意識とは、言語的知的レヴェルに留まっているように思われる⁽¹⁹⁾。実際の意識の流れは、身体感覚と密接に関わりながら、多岐にわたる。身体が外界を取り入れて感じる感覚、過去の記憶、目前に無い事柄に関して持つ考え、満足不満足といった感情、欲求・嫌悪といった情緒、そして意思決定など、雑多に配列され、結合を繰り返

『明暗』（野網）

しながら、意識の流れは形成される。

種々の成分がどのように同時存在し、成分と成分との結合の割合はいかようであり、変化はいかにして起こるのか。時と場合とによって千差万別の状態をひとつひとつ決めながら作家は人物を作成していかなければならない。

登場人物になぜ身体を持たせ、どのように精神を相関させているのかについて考察してきた。身体感覚によって、漠然としている対象に明暗が投げかけられる。再認識の過程でその対象は小説内で実体化する。本小説で創造されたのは、意識と身体との往還運動であった。

むすび

この小説は、心理の克明な描写で登場人物の状況を伝えるのではない。そうではなく、いまだ誰の言葉にも明確に述べられないような情緒の動きを前の描写とすこしずつ重ねながら、そのまとまりがしだいに上昇したり、急に昇りつめたりする様を提示する。これが『明暗』の打ち出した小説内容である。さらに、この動きは小説内部をつなぎあわせる役割を果たしていることにも留意したい。

二人の主人公、津田とお延の、身体で感じ取る印象、それらがフィードバックされて思考を通った観念、そこに合体してくる情緒、このようにつぎからつぎへと小説に現象が湧き起こる。この小説は、諸事物を小説内にはじめから設置しておき、語りあげるのではなく、登場人物同士の掛け合いから、登場人物の印象や推測がまとわりついて飛び交うなかで、不明確だった事柄に対して次第に輪郭線と中味とを備えさせる。小説内にいる人間の信念あるいは実感によって諸々のことが徐々に小説内に現象し、つながりゆく。小説内の出来事、事物はこのような連関のなかで産出される。

津田の記憶といった、曖昧模糊としたことが、取り囲む他者の身体的あるいは精神的把握によって、徐々に実体を持ち出す。登場人物自身、はっきりと意識していなかった印象が、情緒を揺り起こし、ついにそれが精神的領域へと波及する。この経緯こそ『明暗』の描き出そうとしたことである。

人間の感覚こそがおぼろげな対象に明暗を与える。そのイメージに光が当たり、影が生まれはじめる。ウィリアム・ジェイムズから示唆を得て、漱石は小説に、言葉で捕らえがたい微妙な流れを存在させることを試みた。言葉を越えたものを小説に存在させるメカニズム自体が漱石最後の長編小説タイトルとなった。

〔注〕

- (1) James, William. *The Principles of Psychology*. Vol. 1. New York: Dover Publications. 1950. pp. 284, 285. 漱石の蔵書に残っているのは第2巻のみ (*The Principles of Psychology*. Vol. 2. London: Longmans, Green & Co., 1901) だが、『文学論』等に第1巻を引いていることから漱石は第1巻も読んでいる (拙著『夏目漱石の時間の創出』東京大学出版会、30頁)、『心理学大綱』という訳は漱石に従う。
- (2) 唐木順三「『明暗』の成立まで」『明治大正文学研究』季刊第七号、1952年6月、36頁。
- (3) 十川信介による指摘がすでにある。冒頭の「奥」とは、日常生活で見えない「奥」を想像させるが、登場人物同士の関係のみが明瞭で実体が「曖昧模糊」であるからそれは空洞のような「奥」であり、その『奥性』は消滅し、それを実体化する試みは無効に終わらざるえない」と結ばれている (『地名のない街』『文学』第4巻・第3号、1993年夏、14、22、23頁)。
- (4) この小説はしばしば「どの人物も他者との緊張関係におかれ、そこからの脱出を激しく欲しながらそのことでかえってそこに巻き込まれてしまわざるをえないような多声的な世界」を実現しているとされる (柄谷行人「解説」新潮文庫『明暗』、1987年、625頁)。
- (5) 「影象」に「イメージ」とルビをふったのは漱石である。
- (6) James, W. p. 255.
- (7) James, W. pp. 258-259.
- (8) “picturesque light and shade” *Ibid.* pp. 284.

『明暗』（野網）

- (9) James, W. pp. 285.
- (10) 「根調」というのは漱石による造語であると考えられている（『漱石全集』第十一巻、十川信介注釈、岩波書店、1994年、723頁）。漱石は七十七章の「根調」と七十八章の「大根」とを関連させて叙述しようとしているのである。
- (11) James, W. p. 287.
- (12) 小林を、社会主義者に近い思想の持ち主とするこれまでの評価に同意したい。正宗白鳥は「小林は、卑俗であるが、自棄的闘志を持つてゐる。プロレタリア意識をもつてブルジョアに反抗してゐる。有産階級が彼れを侮辱するなら、彼れも有産階級を侮辱してやる。復讐してやるといふ反抗心を有つてゐる」と述べる（『作家論』（一）創元社、1941年238、239頁）。大岡信は「一種の性格破産者であり、『余計者』とよばれたロシヤ前世紀末の知識人たちに若干似ているタイプ」としている（『『明暗』大岡信著作集』4巻、青土社、1977年。『漱石作品論集成第十二巻 明暗』、桜楓社、1991年、99頁）。江藤淳は群小ジャーナリストや不遇な文士のような「インテリ」が「容易に熱狂的な左翼的思想家になり得ることを強く暗示している」と指摘する（『三田文学』46巻8号1956年8月『決定版夏目漱石』1974年11月、新潮社、157頁）。
- (13) 秋山公男は語り手に見える領域、他の作中人物に見えざる領域に着目し、「明晰な語り手視点の介入」によって、「レントゲンで透視する如く」、あるいは、「内視鏡的視点」といった比喩を用いながら、『明暗』の心理分析の質を指摘した（『漱石文学論考—後期作品の方法と構造—』桜楓社、1987年）。しかしながら『明暗』において画期的だったのは、同時代に創始された精神分析学においてそうだったように、そのような器具の力が及ばない所へ、登場人物同士の対話の力で入り込もうとした点にある。
- (14) James, W. p. 245.
- (15) James, W. pp. 250, 251.
- (16) James, W. p. 285.
- (17) James, W. p. 255.

- (18) 小宮豊隆は「深刻精到な心理解剖」と評した（『『明暗』の構成』『漱石襟記』角川書店、1955年、115頁）。猪野謙二はこの小説の中心を「外部の刺戟と自己運動とによって時々刻々と変転する心理の変化と葛藤」であり、「人間活力を唯一の原動力として創造」されていると指摘した（『思潮』8号、1948年3月、『漱石作品論集成第十二巻 明暗』1991年、桜楓社、49、52頁）。寺田透は「意識と言葉の関係のあくなき追求」とした（『明暗』『文学講座 第六巻』1951年、225頁）。関谷由美子は「意識の動態」がこの小説の主人公であるとした（『『明暗』の主人公』『年刊日本の文学第一集』有精堂、1992年、234頁）。
- (19) 飯田祐子は『明暗』を「対照的なコミュニケーションという幻想の崩壊を語るテキスト」として読み解いている（『彼らの物語』名古屋大学出版会、1998年、286頁）。

※『明暗』は『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に1916年（大正5年）5月から同年12月まで連載され、188回をもって未完のまま中絶した。本文の引用は前掲『漱石全集』第十一巻により、章番号を付した。